

かた やぶ 型破りなプレゼント

聖書で「賜物 (gift)」という言葉^{ことば}を調べると、第1コリントの第12章に、その言葉^{ことば}が何度も使われているのが分かります。その章は、御霊^{みたま}の賜物^{たまもの}について書かれた章で、クリスチャンなら願^{ねが}うべき様々な良いことが書かれています。知恵^{ちえ}、知識^{ちしき}、信仰^{しんこう}、いやし、奇跡^{きせき}を行うこと、預言^{よげん}、識別力^{しきべつりよく}、異言^{いげん}を語る、異言^{いげん}を解釈^{がいしゃく}することです。それらは、クリスチャンとしての暮らし^{くらし}を助けるために、神様^{かみさま}が与えてくださる賜物^{たまもの}だと、聖書^{せいしょ}には書かれています。¹



さて、聖書^{せいしょ}は元々^{もともと}、節や章^{せつ しょう}には分かれて
いませんでした。ですから、そのまま次^{つぎ}の章^{しょう}である
第1コリント第13章^{だい しょう}まで読み進めていくと、賜物^{たまもの}に関するパウロの
考察^{こうさつ}が、丸々1章^{まるまる 1 しょう}全体^{ぜんたい}を費^{つひ}やして、私たち^{わたし}が持^もてる一番^{いちばん}大切な賜物^{たまもの}、
つまり愛^{あい}についての説明^{せつめい}へと発展^{はつてん}していくのが分かるでしょう。

もう何度も聞いたことがあるかもしれませんが、改めて考えてみましょう。つまり、その中心^{ちゅうしん}に愛^{あい}がなければ、私たち^{わたし}の好きなクリスマスの伝統^{でんとう}はどれ一つとして、大して素晴らしい
ものにはならないということです。自分^{じぶん}を嫌^{きら}っている人^{ひと}たちとおいしいディナー^{ディナー}を食べ^たるなんて、想像^{そうぞう}できますか？ 自分^{じぶん}がどんなに金持ち^{かねもち}であるかを見せびろがしたいだけの人^{ひと}から
プレゼントをもらったとしたら？ これらの伝統^{でんとう}の背後^{はいご}にある理由^{りゆう}を忘れてしまうと、クリスマスは特別^{とくべつ}ではなくなってしまう。

「クリスマスの封筒」^②は、毎年、何も書かれていない白い封筒をクリスマスツリーに飾るという家族のお話です。それは、父親であるマイクへのプレゼントでした。彼は、クリスマスの商業的な側面が大嫌いでした。宣伝や浪費、それに、家族の一人一人が何を欲しているだろうかなどと考えながら、必死な思いで買い物に走り回ることがイヤだったのです。マイクは、クリスマスの本当の意味を示すものを望んでいました。けれども、彼の妻は、夫にとって意味あるプレゼントとは何なのか、思いあぐねていました。

さて、12歳の息子ケビン^③は、学校のレスリングチームに所属していました。クリスマスの少し前に、スラム街にある教会が後援するチームと、リーグ外対戦がありました。このチームの若者は、ボロボロのスニーカーと普段着でやってきました。息子のチームとは大違いです。息子のチームは、きれいな青いユニフォームを着て、ヒカヒカの新しいレスリングシューズをはいていました。



息子のチームは次々と勝ち進み、対戦チームを打破していきしました。マイクは妻にささやきました。
「相手チームも、一回くらいは勝てばいいのに。こんな風に負けていては、やる気を失くしてしまうよ。」
マイクは子供たちが好きで、普段からリトルリーグのコーチを引き受けていました。

その時、妻に夫へのプレゼントがひらめきました。その日の午後、妻は地元のスポーツ店に行き、レスリング用のヘッドギアとシューズをひとそろい買い、スラム街の教会に匿名で送りました。クリスマス翌に、彼女は自分がしたことと、それが彼へのプレゼントだと書いた紙を封筒に入れて、ツリーの下に置きました。封筒を開け、中の紙を読んだマイクがおもわず顔に浮かべたほほえみは、妻に「良いことをしたね」と告げていました。

クリスマスが来るたびに、彼らはこの習慣に従いました。
そして、封筒は家族のクリスマスのハイライトになったのです。
それはいつも、クリスマスの朝の最後に開かれました。
子供たちは新しいおもちゃを床に置き、お父さんが
ツリーから封筒を取って中身を開けるのを、そばに立って
ワクワクしながら見ていました。

話はそこで終わりではありません。マイクはガンに
がかって亡くなりました。彼が亡くなってから初めての
クリスマスが近づいてきましたが、妻は悲しみに打ち
ひしがれ、ツリーのことなどほとんど忘れていました。
それでも、クリスマスイブには何も書かれていない
封筒を1つ、ツリーに付けました。朝になると、封筒は
3つ増えていました。子供たちはおたがい知らずに、
父親のためにそれぞれ封筒を付けていたのです。

このような習慣は、イエス様の誕生日にイエス様に
プレゼントする、というアイデアを見事に表していると
思います。主は、私たち1人1人が独自の方法で愛や親切を
示すことを、もっと願っておられます。主は、私たちが
ステキなプレゼントを交換して喜ぶ姿を見るのも大好き
ですが、私たちが、何も持っていない者に手を差し伸べ、
予想もしていなかった時にほほえませることほど
素晴らしいことはありません。ヨハネによる福音書の
第13章35節には、こう書かれています。「たがいに
愛し合うならば、それによって、あなたがたがわたしの
弟子であることを、すべての者が認めるであらう。」³

あなたは今年のクリスマス、どんなプレゼントで
覚えてもらいたいですか？



脚注:

1 第一コリント人への手紙 12:7-11

2 1982年、ナンシー・W・ギャビン著、「For the Man Who Hated Christmas」より

3 口語訳聖書

文: ティナ・カップの著作物の編集 原作はJust1Thingに掲載

絵: エスター・マーティン デザイン: ステファン・ミラー

出版: マイ・ワンダー・スタジオ Copyright © 2017年、ファミリーインターナショナル

“Thinking Outside the Gift Box”-Japanese

関連の読み物はこちら ⇒ クリスマス、与えること